

新型コロナウイルス禍による外出自粛の中で、子育て家庭は「公園」の存在意義を改めてかみしめたはず。その公園の設計は「建設コンサルタント」と呼ばれる会社が、行政から委託されて担うケースが多いという。公園はどう設計するのか。建設コンサルで近年、台頭している女性技術者に聞いた。(加藤愛己)

やりがい実感 公園設計の 女性技術者たち



浜松城公園
本丸南広場(浜松)
鈴木加奈子さん

浜松城公園「本丸南広場」を設計した鈴木加奈子さん＝6月、浜松市中区

管理のしやすさも重視

浜松城公園(浜松市中区)は都市公園の中でも市民全般の利用を目的とする「総合公園」だ。設置者の浜松市による歴史ゾーン整備基本計画の一環で、フジヤマ(同区)の鈴木加奈子さん(46)は、同公園南側に2019年春に完成した「本丸南広場」(約1900平方メートル)を設計した。天守閣を中心とした「歴史ゾーン」の玄関口で、歴史解説看板やベンチを配した憩いの場。発掘調査で新たに見つかった安土桃山時代と推定さ

れる野面積みの石垣と、続く天守閣や天守門を望む景観が美しく、写真撮影にも適する。鈴木さんは「『見る』『感じる』を楽しむゾーン。子どもの調べ学習にも役立つと思う」と話す。これまでの「おちばの里親水公園」(湖西市)など7件の公園計画・設計を担当。地元の意見収集で多くの気付きを得るのはもちろん、「公園は整備後の管理運営で価値が変わってくる」として景観整備や舗装、遊具やベンチ、あずまやなど各施設は

使いやすさや耐久性、補修のしやすさを重視して選定、設計しているという。高校生の時、公園で遊ぶ親子を見て「公園を造る仕事」を志し、夢を実現。現在、小学生と保育園児の子育てと仕事の両立に忙しい。「公園はサードスペース(家、職場・学校以外の心地よい場所)になりうる。子どもは、連れてくれば自由に遊んでくれる。親は『この前できなかったことが今日できた』と成長を感じる場所でもある。コロナ禍で移動が制限される中、公園は子にとって親にとっても不可欠なインフラと再認識した」と実感を含める。

「3カ月で3回見に行った」。長泉町に3月、人工芝とカラフルな複合遊具がシンボルの「本宿にこここ公園」(約1600平方メートル)が開園した。設計したのは、同町から委託された静岡コンサルタント(三島市)の今田圭子さん(46)。開園後、実際に利用されているか自らの目で確認せずにはられない。子どもが元気よく遊ぶ姿を見て初めて「良かった」と肩の荷が下り、やりがいを実感するという。子育て家庭が日常使いしている公園の多くは都市公園法に基づき地方自治体や国が設置した「都市公園」だ。自治会など地元要望を受けて設置計画が進む事例もある。本宿にこここ公園は、都市公園の中でも小規模で街区内に住む人が対象の「街区公園」。同社のように行政から公園設計を委託される会社「建設コンサル

タント」は道路や橋、河川、下水道など社会資本(インフラ)整備に先立つ各種調査や測量、設計を手掛ける。設計は計画地の現況調査から始まる。測量で計画地の正確な長さや起伏を調べたり、住宅や学校など周辺の土地利用、公園整備状況、水道などインフラの配置を調べたり。その上で利用者である地元の意見を収集する。本宿にこここ公園は住民代表を対象にワークショップを3回開いた。まず公園の基本方針や遊具などに対する要望を出してもらい、使用目的別に園内を区分け(ゾーニング)した構成案を4案提示。意見を求めて集約し、幼児エリアと小学生エリアに区分して遊具を分散配置する「遊具分散型」が採用された。舗装は安全性の高い人工芝とゴムチップ。駐車場は3台確保した。今田さんは「私たちはあくまでも利用者のお手伝い。納得してもらえる案を提示するために、何度も何度も練る。難しいけれど、経験を重ねて、引き出しを増やす」と話す。遊具選定も腕の見せどころだ。要望に

誰もが楽しめる場所に



本宿にこここ公園(長泉)
今田圭子さん

「本宿にこここ公園」を設計した今田圭子さん＝6月、長泉町内

応えると同時に、安全性、耐久性、予算を考慮するため、日頃から公私問わず外出先近くの公園に寄って遊具を調べたり、メーカーのカタログを見たりして最適解を模索し、利用者や行政に提案する。そしていよいよワークショップの意見を集約した図面を作成する「基本設計」、給排水や照明なども検討し、工事に必要な図面を作成する「実施設計」と続き、

完了すると行政にパトンを戻して工事発注となる。同公園はここまで9カ月要した。同社にとって今田さんは「女性技術者のパイオニア」(鈴木博嗣総務部長)。遊歩道にベンチを設ける業務から始め、20年以上過ぎた。「今は高齢者が増えている。子どもだけでなく、いろいろな人が楽しめる公園を設計してみたい」

内牧さくら公園(静岡)
鈴木杏菜さん



「内牧さくら公園」計画地に立つ鈴木杏菜さん＝6月、静岡市葵区

「内牧さくら公園」(静岡市葵区、約1800平方メートル)は「新東名高速道高架下を利用して子どもが安全に遊べる公園を」との地元自治会の要望を受けて

地元の声反映させ改良

計画が進み、同市が設置を決めた街区公園。昭和設計(同市葵区)の鈴木杏菜さん(28)が自身初の公園設計に挑んだ。2020年度内の完成を予定する。多目的、遊具、サクラを植えた芝生広場の計3ゾーンで構成し、公園名でもある「サクラ」がシンボルだ。地元ワークショップで示した当初案に芝生広場はなかったが、「サクラを植えて花見をしたい」「芝生が欲しい」という要望があった。地元がサクラを誇りとしていることを知り、反映させた案が支持された。きれいな街並みが大好きな鈴木さんは高校生の時から空間づくりの勉強一筋。「今回、利用者の『顔』が見えた。公共空間をつくる責任の重さを感じた」と表情を引き締める。

Park-PFI制度 公園活性化、民間の力で

都市公園を巡っては2017年、都市公園法改正でPark-PFI(公募設置管理)制度が創設された。収益施設を設置するとともに園路など公共部分も一体的に整備する民間事業者を公募し、公園を活性化させる。静岡市は「城北公園」を対象に県内自治体で初めて同

制度を活用する計画だ(新型コロナウイルスの影響で公募開始時期は検討中)。カフェなど飲食施設設置と無料駐車場(48台)の整備を求めている。都市公園に設置されている遊具は国の16年度調査によると、踏み板式ぶらんこ、滑り台、砂場、スプリング遊具の順に数が多く、つり輪、回転塔、ゆりかご型ぶらんこ、石・コンクリート製の山の順に少ない。13年度調査か

ら増加数が多いのは複合遊具(鋼製)や健康器具系施設。減少数が多いのは砂場、スプリング遊具。静岡県は17年度から官民連携で建設産業の担い手確保やイメージアップを目的に「静岡どほくらぶ」活動に取り組み、一環で県建設コンサルタンツ協会は県内の防災的公園のミニガイド冊子「CONPA」などを作成した。